

“Deliverances *past* are the *pledges of future deliverances*”

—Matthew Newcomen の火薬陰謀事件説教—

高橋 正平

はじめに

1642年と言えば8月に国王派による挙兵によりいわゆるピューリタン革命が勃発した年であり、10月にはエッジヒルの戦いが始まり、革命は泥沼の道を歩むことになる。同年11月5日、1605年に起こった火薬陰謀事件記念日にピューリタンのNewcomenは記念説教を行うことになる。火薬陰謀事件はカトリック教徒の過激派ジェズイットが企てた国会爆破計画で、国会臨席のJames I世、王妃、息子や政府の要人を国会爆破もろとも殺害しようという前代未聞の反逆事件である。本論でNewcomenを取り上げる理由は彼がピューリタンであるということである。本来火薬陰謀事件説教はJames I世やCharles I世期には専ら英国国教会派の説教家によって事件日の11月5日に毎年行われていた。内乱が勃発し、王党派が劣勢を強いられ、ピューリタンが実権を握ると今度はピューリタン説教家が11月5日に火薬陰謀事件説教を行うようになった。問題点として考えられるのは英国国教会派説教家による説教とピューリタン説教家による説教との間にはどのような違いがあるのかということである。そもそも違いはあるのであろうか。私はこれまでWilliam Barlow、Lancelot Andrewes、John Donne等の英国国教会派説教家による火薬陰謀事件説教を論じてきた。彼らは皆体制派説教家であるので説教の目的はJames I世王朝擁護である。説教で事件の首謀者ジェズイットを徹底的に糾弾することによりJames I世支持の姿勢を強く打ち出す。それはJames I世が国会演説で事件記念日に事件追悼説教を期待することを受けての説教であった⁽¹⁾。彼らの説教には共通した手順があった。それは(1)事件に類似した一節を聖書から選び、それを事件に適応することによって聖書から事件を批判する。(2)事件の残忍性(3)James I世による事件発覚(4)James I世の奇跡的救出(5)James I世を救出してくれた神の慈悲強調(6)神の慈悲への感謝、ほぼすべての英国国教会派説教家による火薬陰謀事件説教はだいたいこのような手順を踏んでいた。事件の凶暴性、James I世の神格化、奇跡的な救出、神への感謝、これらが英国国教会派説教家の説教には幾度となく繰り返される。それではピューリタンのNewcomenの火薬陰謀事件説教はどうであろうか。彼は1642年11月5日の火薬陰謀事件日に下院で説教を行っている。説教のタイトルは「教会の敵の狡猾と残虐」(*The Craft and Cruelty of the Churches Adversaries*)⁽²⁾である。「教会の敵」とは事件を計画したカトリック教の過激派ジェズイットであり、彼らの「狡猾」と「残虐」がいかん事件に表れているかを論じた説教である。ピューリタンと英国国教会派はその主義・主張が異なるゆえ、当然彼らの説教にも違いが見られることが予想される。一方は体制派、他方は反体制派である。反王権派のピューリタンからしてみれば王殺害を狙った火薬陰謀事件には共鳴できるものがあるように思われるが、はたしてNewcomenは火薬陰謀事件を容認する立場を取っているのであろうか。以下小

論では英国国教会派の火薬陰謀事件説教家 Barlow との比較から Newcomen の説教を論じていきたい。

1 英国国教会説教家 Barlow の火薬陰謀事件説教

James I 世の国会演説の翌日1605年11月10日、Barlow は Paul's Cross で火薬陰謀記念説教を行った。Paul's Cross は旧セントポール大聖堂の境内に設置された屋外の説教壇で、著名な説教家が説教を行っていた場所である。火薬陰謀事件説教を行ったとき Barlow は Rochester の主教であったが、その後 Lincoln の主教となった。Barlow はエリザベス女王のチャプレンであり、James I 世即位後は王からの信頼を受け、1604年のピューリタンとの Hampton Court 会議の報告記ではピューリタンに対する James I 世の一方的な勝利の報告書を書いたり、その他「忠誓の誓い」論争でも James I 世を擁護したことで知られている。その功労のためか Barlow は欽定訳聖書翻訳委員会にも加わる。彼は典型的な James I 世寄りの体制派説教家であった。Barlow は Essex 伯の処刑に関して1601年に同じ Paul's Cross で Essex 伯の罪の自白及び国家反逆罪への後悔告白をロンドン市民に周知させるよう Cecil から依頼を受け、説教したことがあった。Barlow は11月10日に政府からの要請により Paul's Cross で火薬陰謀記念説教を行い、火薬陰謀事件についての真相を一般の人々に明らかにすることとなった。その説教は火薬陰謀事件についての最初の真相解明であり、その説明はおおむね正確であると言われている内容である⁽³⁾。そもそも Paul's Cross で説教家は「誤りを示し、王の意志を宣言する」ために説教を命じられていた⁽⁴⁾。Donne も James I 世から命じられ、王の議論を引き起こした“Directions for Preachers”を擁護するために1622年王から説教を命じられたことがあった。いわば Paul's Cross での説教は政府の宣伝のために使用されていたのである。Barlow は、James I 世の国会演説直後にその余韻も覚めやらぬうちに陰謀事件を非難する説教を行ったが、それは James I 世の国会演説の内容をくみ取った James I 世擁護見え見えの説教であった。Maclure はその説教を“the most fulsome exhibition of this order⁽⁵⁾”と評しているように James I 世を褒めまくった説教である。Barlow は、説教前日の James I 世による国会演説の場に居合わせたか、Barlow の説教は James I 世の国会演説抜きでは考えられない説教である。以下、英国国教会派 Barlow の説教を James I 世の国会演説との関連から見ていきたい。

3 James I 世と David

Barlow が説教に選んだ聖書は「詩編」18章50節の“Great Deliuerances giueth he vnto his King, and sheweth mercy to his annointed Dauid and to his seede for euer.”（主はその王に大いなる勝利を与え、その油そそがれた者に、David とその子孫とに、とこしえにいつくしみを加えられるでしょう）であった。Barlow が「詩編」この一節を説教の冒頭に掲げた理由は二点考えられる。第一点は James I 世が国会演説で「詩編」を引用し、自らに対する主の“mercy”に幾度となく感謝していたからである。James I 世が「詩編」を引用していたので Barlow も「詩編」を引用し、James I 世の気を引こうとしたのである。

第二の理由としては Barlow が David と James I 世の類似性を訴えたかったことが挙げられる。Barlow の最初の火薬陰謀事件説教は Barlow 以後の火薬陰謀事件説教の模範となる説教であった。つまり以後の説教家たちは説教の冒頭に火薬陰謀事件と類似した一節を聖書から選び、それを基にして説教を進め、最終的にはその一節を火薬陰謀事件に適應することで説教を終える。それゆえ引用する聖書、それもほとんどが旧約聖書からの一節であるが、その一節に登場する人物と James I 世は重ね合わされてくる。これは James I 世にとってこのうえない賛辞となることは間違いない。上記の「詩編」18章50節を説教の主題にした Barlow の意図は容易に理解できる。Barlow は「詩編」18章50節を火薬陰謀事件に適應するのである。Barlow は最初主と David の関係を述べ、次に主と James I 世、James I 世と David の関係に論を移していく。始めに主と David の関係については、「詩編」18章43節で「あなたは民の争いからわたしを救い」とあるので、主は David を戦いから救出してくれたことがわかる。「詩編」の作者が David であるかは定かでないが、Barlow は「詩編」の作者を David と見なし、ダビデは主によって戦いから救出されたと考えている。しかもその救出は一度限りの救出ではない。David が逆境に直面すれば主は必ずや David を救出してくれるのである。Barlow にとって「詩編」は “Triumphing Song, after his [David’s] many rescues and victories⁽⁶⁾” である。「詩編」は主が多くの救出と勝利を David に与えてくれたことに対する勝利の歌であり、感謝の歌である。主と David との特殊な関係について Barlow は次のように言う。

...it seemeth that God and *David* had entred a couenant each with other, Psalme 89.2, ratified on each parte with an othe, God for his parte took his oath, Psalme 89.35, *I have sworn by my Holines, that I will neuer faile David*⁽⁷⁾

主は自らが選んだ者、David と契約を結び、David の「子孫をとこしえに堅くし、あなたの王座を建てて、よろずに至らせる」（「詩編」89章3-4節）と言ったように、David と主には特別な関係がある。更に「詩編」89章35節では「わたしはわたしの聖によって誓った。わたしは決して David を見捨てることはしない。」と述べられ、主と David の堅い結びつきが強調されている。冒頭に挙げた「詩編」18章50節はいわば主と David との特別な関係と David への主の永遠の加護を再度確約している箇所である。David の背後には常に主がおり、主が David を見放すことはありえない。David にとっては主からの強力な援護が絶えず存在する。“deliverances” と複数形であることから主の救いは一回切りではなく、救出は幾度も続き、“for euer” である。実際 David の場合多くの危機と同じくらの主による救出があった。

For the first, his [David’s] Rescew from the Beares pawe, the Lions iawe, Saules iaeline, Goliaths speare, Achitophels counsell, Docgs slaunder, Schemi his reuiling, the mouth of the sword, the murren of his people, the multiplicite of his sinne, the rebellion of his sonne...is an euident demonstration...⁽⁸⁾

David は、「熊の足」「ライオンのあご」「サウルの投げ槍」「ゴリアテの槍」「アヒトベル

の助言」「ドクゲの中傷」「シェミーの悪口」「刀」「人々の疫病」「多数の彼の罪」「息子の反乱」と様々な危機に直面した。しかし、David はこれらの危機を主によって切り抜けることができた。Barlow は何度も主の mercy に言及し、いかに主が David に mercy を示したかを述べる。Barlow は、主の mercy は多すぎて数えることはできないと David が述べる「詩編」40章5節を引用する。

Thy mercies exceede all account, I would declare them, and speake of them, but I am not able to expresse them⁽⁹⁾.

David は主の mercy がいかに多いかを認め、“God had so many ways deliuered him [David]...as if hee intended nothing else but to deliuer him⁽¹⁰⁾.” と述べ、主と David の密接な関係を強調する。更に、“Many are the troubles of the righteous, but the Lord deliuered them out of all...⁽¹¹⁾” と「詩編」34章19節に言及し、正しき者に災いは多いが、主はその災いから救ってくれる、と正しい者に主の救いは限りがないことを述べる。Barlow は説教の前半で主の mercy だけを論ずる。それも説教の冒頭に挙げた主が David を救出してくれた一節を James I 世に適応したいがためである。Barlow にとっては主の救出はまた主の mercy の表れでもある。David への主の mercy は David に多くの「光栄」をもたらす。

..his [David’s] Honours were as many as daungers, the favour with his Prince, the loue of the people, the designed heritage of a Kingdome, the glorious wearing of a Crowne, the triumphant victories ouer his enemies, the secure establishment of his Kingdome in his sonne while he liued: these Salutes it pleased GOD to afforde him and with an othe to assure him; I will make him my first borne higher than the Kinges of the earth⁽¹²⁾:

David の王子からの好意、国民の愛、王国の継承、栄光の王就任、敵への勝利、息子における確実な王国創立、これらすべてを神は David に与え、更には「神の長子 = David をこの世の王よりも高い地位につける」との誓約をも神から David は得ているのである。David には主からの数々の加護があり、主と David はいわば一心同体的な関係にある。主からこれほどの加護を一身に受けた David にはもはや恐れるものは何もない。David を主の長子にするという主の誓約ほど力強い援護はない。Barlow は「詩編」を引用し、主と David との特別な関係を述べ、いかに主が正しい者をすべての災いから助け出したかを強調する。Barlow の関心はいかにして「詩編」を James I 世に適応するかである。Barlow は、James I 世が特に好んだ「詩編」を説教の題材に使用したが、それを James I 世自身に適応し、James I 世には神の加護があることを主張したかった。いかにして James I 世の火薬陰謀事件からの奇跡的な救出を賞賛するかが説教家に課せられた任務であった。「詩篇」18章50節を説教の題材に選んだことは、James I 世が David と同じ関係にあることを意味する。David と主との関係はそのまま James I 世と主の関係になる。火薬陰謀事件から奇跡的に難を逃れた James I 世は同様の危機から脱した David となる。Barlow は、James I 世と David の親密な類似性について更に次のように言う。

It seemeth by his Maiesties speach yesterday; that his case & race hath bin the same with the Prophet [David's] ...For no sooner was hee conceiued in the wombe, but presentlie he was hazarded, no sooner deliuered from the wombe, but inuironed with daunger, and what perils he hath passed euer since he was borne, need not to be related, they are so manifest: dismissed from those parts with a dreadfull farewell of a desperate Treacherie and entertained among vs with a Conspiracie vnnaturall& dangerous: heere Crowned with Thornes, before he could get on the Crowne of Golde⁽¹³⁾.

“his Maiestiespeach yesterday” から Barlow が国会で James I 世の演説を聞いたことがわかる。James I 世と David を比較すると James I 世を取り巻く境遇と家系は David と酷似している。James I 世も David も誕生と同時に様々な危機に遭遇し、「黄金の冠」を身につける前に数々の「いばら」の冠を被らざるをえなかったほど幾多の困難・危機に直面した。母親の胎内に孕まれるや否や James I 世は危険にさらされたとか生まれるや否や危険に包囲されたとか誕生後経験した危険に Barlow は言及するが、それは以下の James I 世の国会演説をふまえていると思われる。

...and I amongst all other Kings haue euer bene subiect vnto them [innumerable dangers], not onely euer since my birth, but euen as I may iustly say, before my birth: and while I was in my mothers belly: yet haue I bene exposed to two more speciall and greater dangers then all the rest⁽¹⁴⁾.

David が様々な危機から主によって救出されたように James I 世も神の慈悲により様々な危機から救出された。上記の “two more speciall and greater dangers” は James I 世がスコットランドの James 6 世であったときの Gowrie 兄弟による軟禁事件と火薬陰謀事件を意味しているが、その軟禁事件と火薬陰謀事件からの脱出は James I 世への主の特別な慈悲の結果であったのである。James I 世がいかなる困難・窮地にあっても主は王を見捨てることなく、いつも援助の手を差し伸べてくれた。それほど主の James I 世への思いは強い。このように James I 世と主との密接な関係を背景にして Barlow は「詩編」を James I 世に適応することによって、James I 世を David の再来と見なす。そしてキリストは David の家系を引き継いでいると言われていたが、Barlow の図式に従えば、James I 世の息子がキリストになる。James I 世にとってこれほどの賛辞・称賛はない。しかも James I 世の体験は David の数々の苦しみに勝るとも劣らないものである。

All these of Dauids were great indeed, but compared to this of our gracious King [James I];(the last, I trust, for a worse there cannot be) is but as a minium to a *large*, whether we consider therein, eyther the Plot it selfe, or the Con-comitance with it, or the Consequences of it⁽¹⁵⁾.

火薬陰謀事件はその計画、付随事情、結果からして David 以上の苦しみを体現した事件である。James I 世は神によって窮地を脱出したが、我々は何をなすべきか。ここでも

Barlow は David と神の関係を James I 世と神の関係とする。

Hath GOD done great thinges for vs. Psalm, 126.3 ? Let vs with the Prophet [David] aunswere him in the same kinde, and say; Wee will giue great thankes unto the Lorde. Dooth hee...poure out his benefites vpon vs, Psalm.68.19? Let vs againe...powre out our heartes before him, for God is our hope, Psalme 62.8. Dooth hee giue vs cause to triumph, it is our parts as Dauid here to aunswere him....⁽¹⁶⁾

主は David に「大いなること」をなしてくれた。「日々われらの荷を負われる」はほむべきである。同様 David と同じ境遇にあった James I 世にも主は「大いなること」を成し遂げてくれたので主に対し「大きな感謝」を捧げなければならない。David が主に答えたようにイギリス国民も主に対して答えるのが「我々の責務」である。ではイギリス国民は何をなすべきか。それは「詩編」で David が行ったことで、(1) 勝利の言葉で主による救出を高らかに宣言すること (2) 貧者に勝利の施しをすること (3) 心からのお祈りを主に捧げること (4) 勝利の食事をし、並々ならぬ宴を催すことである。これは “straunge deliuerance” に際し「神の民」ユダヤ人が自ら行ったことである⁽¹⁷⁾。Barlow は、David を James I 世に再現させるようとしているが、Barlow の James I 世を意識した態度に我々は Barlow の王への強い追従の念を禁じ得ない。James I 世はいわば残虐極まる火薬陰謀事件という「死」から復活したのである。「死」からの復活、それは我々に否応なしにキリストを思い出させる。James I 世はキリストとも重ね合わされてくる。

Dead in the Cabinet of the Conspirators, dead in the intention of the Villaine in the Vault, dead in the preparation of false-hearted rebels, but...hee is alieue againe, escaping from manie daungers, Hee liued,...to bee brought in vnto vs, from Hebron vnto Ierusalem, from the Northerne climat to these Southerne parte, now...hee is alieue vnto vs...from the very gates of death, from the Iawes of the deuourer, from the lowest pit⁽¹⁸⁾.

James I 世は陰謀者の小室で死に、地下納骨場での悪漢どもの計画の中で死に、偽りの心の反逆者の準備のなかで死んだのも同然であった。しかし、彼は奇跡的にその難を逃れた。その James I 世はエルサレム帰還まで種々の危機に遭遇した David とオーバーラップされてくる。James I 世は「死の門」「むさぼり食う人のあご」「最も深き地獄」から帰還した人である。ここでは James I 世は生命の危機を脱したキリストとも重ね合わされてくる。Barlow は、爆破の危機を脱した James I 世が満足し、国家が喜ぶまで、敵を困惑させ、福音を維持し、神の栄光へと至るまで英国国民と共に生き、国民を支配することを願う。James I 世は英国及び英国国民に平和と神の祝福をもたらすのである。それはまた英国の繁栄にも至る。国家の長としての James I 世に英国及び英国国民のすべてが依存している。これほどまでの賛辞を James I 世に捧げた Barlow は最後に説教の冒頭に挙げた「詩編」の一節の「主の王 (his King)」の「王」と「油注がれた David」の「油注がれた (annointed)」に言及する。

...I might truly haue taken occasion, to haue shewed how these titles [his King and his annointed] doe agree to our dread Soueraigne [James I], both that hee is a King, and that hee is a *Gods King*, as having in him all the partes that may concurr either in a king or in a good King, to whom that title, first attributed to *David*,...the *light of Israel*, principally appertaineth, as one from whose resplendent brightnesse, al the kingdomes of Christendom may receiue their light⁽¹⁹⁾.

「王または良き王に集中する才能」を有する James I 世はまさに「良き王」であり、「神の王」である。Barlow は、「神の王」「油そそがれた者」という呼びかけは James I 世に一致していると言う。なぜかと言えば James I 世は「王」であり、しかも「神に選ばれた王」であるからである。更に James I 世には「イスラエルの光」という呼称がふさわしく、James I 世は、キリスト教界のすべての王国がその光を受けるまばゆいばかりの輝きを有している。「イスラエルの光」は元来 David を意味するが、Barlow はそれを James I 世にあてはめている。神から選ばれ、神から油を注がれた David はまた James I 世となってくる。James I 世も David 同様神から選ばれ、神権を現世で行使する神の代理人なのである。Barlow は、James I 世の王権神授説を背景に David の再来としての James I 世を賞賛する。David が様々な才能に恵まれていたように、James I 世も “pregnant wit”、“ready apprehension”、“sound iudgement”、“present dispatchh”、“impregnable memory”⁽²⁰⁾ を備えている。James I 世はいわばキリスト教界の希望の星である。神から油注がれた James I 世は神聖な存在である。Barlow の説教には徹底した James I 世賛美、賞賛が頻出し、それがすべて David との比較からなされる。Barlow にとっていかに「詩篇」から火薬陰謀事件を糾弾し、いかにして「詩編」の作者と言われた David を James I 世に適応するかが最大の関心事であった。それは James I 世が特に「詩篇」を愛読し、自ら David の再来と考えた James I 世の胸中を十分に汲み取った結果でもあった。James I 世は、国会演説では David についてそれほど多くは言及していないが、彼の著作には「詩篇」を扱ったものが多く、「詩篇」の英訳も試みたほど「詩篇」には特別な感情を抱いていた。Barlow の火薬陰謀事件記念説教はいわば David 再来としての James I 世賛美なのである。聖書のある時代の特別な人物、事件に適応する方法は当時であっては目新しいことではなかった。以後多くの説教家が火薬陰謀記念説教を行うが、それはすべて聖書の一部を火薬陰謀事件に適応する手法を採っているのである。特に Lancelot Andrewes は10編の火薬陰謀記念説教を James I 世臨席の下 Whitehall で行っているが、それらはすべて聖書の一節を火薬陰謀事件に適応する手法によっている。Andrewes だけではない。以後のすべての説教家はすべてこの説教方法を踏襲している。火薬陰謀記念説教を行う説教家は以後火薬陰謀事件にふさわしい一節を聖書から探し出すことになるが、いずれの説教家も同じ手法で火薬陰謀記念を行うので火薬陰謀記念説教はいささかマンネリの感も与えなくはない。裏を返せばいかにして James I 世の意向に沿って説教を行うかが説教家の関心事となってくるのであって、火薬陰謀記念説教は一種の「儀式」じみた説教となっていく。

Barlow は、James I 世の国会演説の翌日急遽火薬陰謀事件非難の説教を行った。Barlow は、James I 世の国会演説を十分意識し、「詩編」の一節を James I 世に適応することによって James I 世を喜ばせようとした。神の慈悲、事件の残虐、事件発覚者として

の James I 世、王の神聖を王の演説と歩調を合わせるとく忠実に踏襲している。そして旧約聖書の David を James I 世と重ね合わせ、James I 世を十七世紀英国における David 再来として賞賛している。Barlow の説教は、徹底した James I 世賛美であり、御前説教家としての責務を Barlow は十分に果たすことになる。そして、Barlow の説教方法が以後の火薬陰謀記念説教のモデルとなっていく。以後の説教家はいかにして「詩編」の一節を火薬陰謀事件に適応するかに懸命とならざるをえなくなってくる。説教の成否はひとえに聖書の一節がいかに火薬陰謀事件と合致するか、いかにして James I 世を褒め称えるかにかかっている。その意味で火薬陰謀事件記念説教に関わる説教家は「聖書探し」に奔走せざるをえなくなってくる。James I 世自身も「詩編」を好み、自らを David と評し、また評されたことがあった。自他共に許す David 再来であったわけである。聖書にすべての行動の規範を見出し、それによって人々を説得し、人々に安堵を与える。James I 世後益々その勢力を増すピューリタンも聖書に彼らの行動の規範を見だしていたことを考えれば、聖書の時代への適応がいかに一般化していたかが容易に理解できよう。御前説教家という立場上、Barlow が James I 世にときには追従と思われても致し方のない必要以上の賛辞を送ることは避けることのできないことだった。それに、説教家はその成否によって以後の地位が王から確約されるということも Barlow は十分意識していたであろう。Barlow は、この後 James I 世が国内のカトリック教徒に課した「忠誓の誓い」論争に加わり、過激なカトリック教徒を批判することになるが、それは火薬陰謀記念説教同様王への追従で満ちた書であった⁽²¹⁾。そのためカトリック教会側からの反論を受けるが、その Barlow の反論の欠点を是正したのがダンの『偽殉教者』であったことを考慮すると⁽²²⁾、Barlow に王への追従的な姿勢が見られるのは当然のことであった。いずれにせよ、Barlow の Paul's Cross での説教は手法と主題において以後の火薬陰謀記念説教の先駆けとなっているという点では無視できない説教となっている。

Barlow は、「詩篇」18章50節を火薬陰謀事件に適応し、David と同じかそれ以上の困苦を James I 世は体験したと言う。「詩篇」18章50節は、その内容が火薬陰謀記事件に符号する。Barlow の火薬陰謀事件記念説教は最初から Barlow の意図が読みとれる内容の説教である。Barlow は James I 世をよく知っていた。特に聖書では何を James I 世が好んでいたかを Barlow はあらかじめ知っていた。それゆえに Barlow は意図的に「詩篇」を説教に選んだのである。また、Barlow は説教前日の James I 世の国会演説を聞いており、James I 世の火薬陰謀事件への態度を知っていた。事件への非難は当然である。要はそれをいかに行うかである。幸いにも説教前日 James I 世は国会演説を行った。そこから Barlow はどのように説教を行えばよいかを Barlow は察した。それは最初に mercy と関係のある一節を「詩編」から選び出し、David と主の関係から James I 世と主の関係に移り、David 同様 James I 世への主の mercy を訴えるのである。この方法により James I 世の神格化は一層強化され、それは James I 世の王権神授説擁護にもつらなる。

Barlow は、James I 世を第一に David と重ね合わせて扱うことを説教の重要なテーマにした。それも Barlow が James I 世の国会演説をしていたからである。事件からの奇跡的救出、神の慈悲、事件の残虐、James I 世の手紙の解説、これらすべては James I 世が国会演説で述べたことで、Barlow はそれらを熟知していた。そして James I 世の発言に呼応するかのよう演説直後の説教で Barlow は James I 世の発言を繰り返した。それは

余りにも James I 世を意識した印象が強すぎ、第三者には典型的な James I 世賞賛説教の感を与えかねない。James I 世の国会演説翌日の説教ということもあり、Barlow の冷静な火薬陰謀事件分析からくる抑制のきいた事件への批判というよりはむしろ James I 世をいかに喜ばせ、いかに王から気に入られるかに精力を注いだ説教となっていると言えよう。火薬陰謀記念説教の主題はあらかじめ聴衆にはわかりきったことであった。いかにして事件とその首謀者を非難し、そして James I 世を賛美するかが説教のテーマであった。その意味では Barlow の説教は聴衆の予想通りの説教であったであろう。Maclure は、Barlow の説教における “sycophantic flattery” を指摘しているが⁽²³⁾、それも Barlow の説教を読めば一目瞭然である。Maclure は更に「長くはなばなしい王への賞賛が続く」と言い、Barlow の説教が以後の火薬陰謀事件説教の決まった方法を示したとも言っている⁽²⁴⁾。つまり Barlow の説教がこれ以後の火薬陰謀事件説教のモデルになったのである。その意味では Barlow の説教は火薬陰謀事件説教史においてはきわめて重要な位置を占めている。以後の火薬陰謀事件説教家は説教で使用する聖書の一節を「詩編」から選び、James I 世と David の比較から James I 世を賞賛し、さらには事件への批判を向けるが、これはすべて Barlow が出発点となっている。説教において事件の首謀者を批判するのは当然のことであるが、それよりも Barlow は James I 世の神格化に熱意を注ぎ、James I 世へ最大の賛辞を与える。英国民は1588年のスペイン無敵艦隊撃破と1605年の火薬陰謀事件回避からますますイスラエル人同様神から選ばれた民という意識を強くする。火薬陰謀事件は James I 世への神の特別な mercy によって阻止される。James I 世はまさしく「神の選民」なのである。

4 Barlow と火薬陰謀事件

Barlow は説教の序文で火薬陰謀事件を「この最近の悲劇的喜劇的叛逆⁽²⁵⁾」と言っている。その意味は、恐ろしい意図の点で悲劇的で、幸運な時宜にかなった事件の発覚という点において「喜劇的」である。「悲劇」としての事件観は事件の残虐であり、「喜劇」としての事件観は James I 世の奇跡的な事件からの救出である。これは James I 世の国会演説を意識した言葉である。上記3では Barlow が James I 世の国会演説で引用した「詩編」の一節からいかに David の mercy をくみ取り、David 再来としての James I 世観を論じたが、ここでは James I 世の国会演説での火薬陰謀事件観に Barlow がどのように反応しているかを立証していきたい。

James I 世の火薬陰謀事件への態度はいかにそれが残虐であったかである。James I 世は火薬陰謀直後の国会演説で陰謀事件の残虐に再三触れ、事件は悪魔が引き起こした事件以上であるとその陰謀を非難していた。James I 世の火薬陰謀事件の残虐についてはすでに触れたので⁽²⁶⁾、ここでは繰り返さないが火薬陰謀事件は英国歴史上未だかつて記録されたことのない事件である。火薬陰謀事件は歴史上それに匹敵する事件はないという表現は以後の説教家たちが必ずと言っていいほど使用する表現である。Barlow は、自ら James I 世の国会演説を聞いた一人であったが、James I 世の演説を汲み、最初に事件からの神の慈悲による救出を述べ、次に王が力説していた事件の残虐に移る。Barlow は次のように言う。

First in the Plot, observe I pray you, *a cruell Execution, an inhumane crueltie, a brutish immanities, a diuelish brutishnes, & an Hyperbolicall, yea an hyperdiabolicall diuelishnes*⁽²⁷⁾.

火薬陰謀事件は、「残虐な実行、非人道的な残虐、残虐な残忍性、悪魔的な残酷さ、大げさな、超悪魔的な極悪さ」である。火薬陰謀事件は残虐、悪魔性においてその限度を超えている。否、事件には悪魔以上の残虐がある。なぜならば悪魔は人の肉体の死にのみ満足するが、火薬陰謀犯は魂の死をも行うからである。爆破事件は一瞬の内に実行されるから人々は自らの罪の悔い改めの余裕がない。肉体と魂を同時に破壊する火薬陰謀事件はまさに悪魔以上の仕業で、それは「比類のない反逆」、「比類のない大量殺戮」であり、過去の歴史や聖書を見てもそれに匹敵する残虐な事件はない。事件の首謀者 Guy Fawkes は生き残り、国会議事堂と肉体が天高く舞い上がるのを見て、笑っていたかったと Barlow は言う。火薬陰謀事件は、「国家のすべてを完全に破壊する矯正できない惨事であり、極めて忌まわしい計画⁽²⁸⁾」なのである。火薬陰謀事件が国家の機能を完全に停止させるほどの壊滅的な状況を国家にもたらすことを評して Barlow は次のように言う。

...in this designe [the Gunpowder Plot] ...with one blast, at one blow, in one twinkling of an eye, should have bin crushed together, the Government, the Councill, the wisdom, the Religion, the Learning, the strength, the Iustice, of the whole land⁽²⁹⁾.

英国の「政府」、「評議会」、「英知」、「宗教」、「学識」、「強さ」、「正義」が一瞬のうちに吹き飛ばされればいかなる結果が国家に生ずるかは自明である。Barlow は国家の消滅を防ぐためにこれらの必要性を聖書から擁護するが、何と言っても最大の問題は王を失うということである。王を失うことは何を意味するか。「川の源が止められれば、川は水が流れなくなる。同様に指導者が取り除かれればその代理は何もできない⁽³⁰⁾」James I 世王朝にとって王を失うことは王朝の消滅を意味する。Barlow は James I 世が英国にとって不可欠な存在であることを強調する。英国の存続は偏に James I 世にかかっている。事件の残虐を指摘し、その結果を憂慮し、併せて James I 世王朝の擁護の姿勢を強く打ち出す Barlow に我々はいかに Barlow が James I 世を意識していたかを知る。Barlow は James I 世とピューリタンとの間で行われたハンプトン・コート会議報告記で王を激賞し、その結果 Rochester の Bishop を与えられていた。そのような経緯を知る Barlow にとって火薬陰謀事件記念説教で彼が何をなすべきかはわかっていた。Trevor-Roper は Barlow を初めとする James I 世にへつらった説教家たちを評して “worldly, courtly, talented place-hunting dilettanti, the ornamental betrayers of the Church, the Bishops of King James⁽³¹⁾” と言ったが、まさしく彼らは「地位さがしの好事家」であった。

James I 世は国会演説でもう一つ重要な点に触れていた。それは陰謀事件の発覚者としての王自身である。これについては上記で James I 世の言葉を引用したが、James I 世は自ら火薬陰謀事件を未然に防いだと自負していた⁽³²⁾。James I 世は事件の計画を記した謎めいた書簡を部下から受けとり、即座にその謎を解説した。事件発覚者としての James I 世についてはこの後の多くの火薬陰謀事件記念説教を行った説教家が必ずと言っていいほど言及した説教のお決まりのテーマの一つである。それも James I 世の特別な才能を賞賛

することになるからである。Barlow も事件発覚者としての James I 世について触れることを忘れはしない。

...for the discovery of the danger [of the Plot], we must needs adde with the same Prophet, Psal. 17.7. *Mirificasti misericordias*, thy mercies thou hast made *maruellous*; for surelie, there were wonders in the disclosing thereof [of the Plot]: As first by a letter written without a name, in a diguised hand...to a Noble Gentleman (affected that way in Religion) who hath therin discharged the part both of a loyal and honourable Subiect; his dutie hee shewed, in reuealing what was written fearing some danger might be intended, his honour appeared in the detestation of such a horrible intention⁽³³⁾.

事件はその実行犯 Francis Tresham が義兄の Lord Monteagle に国会出席を見合わせる内容の手紙を送ったことから発覚した。Monteagle が事の重大さの気づき、その手紙をもって Salisbury 伯へ行き、Salisbury 伯が手紙を読み解き、火薬による国会爆破を見破った。Salisbury 伯は、しかし、手紙の解説を James I 世に任せた。文中の “a Noble Gentleman” とは Lord Monteagle であり、彼はカトリック教徒であった。手紙を読んだ James I 世については次のように Barlow は述べる。

By his Maiesties *apprehension*, who though he walketh securely, in the sinceritie of his Conscience, and innocency of his carriage (which makes him less ielous and suspitious of daunger) yet his heart gaue him (by some wordes in that letter) that there might be some fiery Engine, perhaps remembering his Fathers Case, who was blowne vp with powder....This *solertia and ingeniositie of spirit* (which in his Maiestie I haue before obserued) makes mee to thinke that speech of the heathen man to be true, *Nullus vir magnus sine afflatu diuino*, and that in Kinges there is a diuine inspiration⁽³⁴⁾. (E)

Barlow の James I 世への追従的な賞賛が顕著な文章であるが、James I 世の良心の誠実さ、純潔な身のこなしから始まり天与の靈感によって手紙の解説を行ったという言葉は James I 世に対するこのうえない賞賛となる。Barlow は James I 世が火薬陰謀事件を解決したことをさらに述べる。

And blowne out should they [the attendants at the Lower House] haue bin vnless the father of lightes had caused light to shine out of darknesse, by discovering and reuealing this worke of darknesse: so that we may truely now conclude with Daudid, Psal.97.11....Light is sprung vp for the Righteous, and ioy vnto them that are true hearted⁽³⁵⁾.

「光の父」たる神が「暗闇のこの業」＝火薬陰謀事件を発見し、明らかにすることによって暗闇から光が輝き出さなければ国会列席者は吹き飛ばされただろうと Barlow は言う。そして「詩編」を引用し、「光は正しい人のために現れ、喜びは心の正しい者のために現

れる」という。神は正しい者を顧み、導いてくれる。火薬陰謀事件が失敗に帰したのは神のお陰であるが、それはまた James I 世の謎の書簡解読のせいでもある。Barlow は、火薬陰謀事件は James I 世によって未然に防がれたと言いたいのであるが、「光の父」=神と James I 世はここでは同一視されている。James I 世の謎めいた手紙の解読への Barlow への言及は明らかに James I 世の国会演説を反映している。Barlow による James I 世のあからさまな神格化である。主の慈悲による James I 世救出、事件の残虐、事件を未然に防いだ James I 世の手紙解読、これらはすべて Barlow が James I 世の国会演説を強く意識した結果である。

Barlow は典型的な体制派説教家である。彼が頭角を現したのは James I 世とピューリタンとの間で行われたハンプトン・コート会議であった。Barlow はこの会議の報告を表すにあたり徹底的に James I 世を擁護した。その報償として Barlow は新たな bishop 職を得ることになる。これに味をしめたわけではあるまいが、Barlow は以後 James I 世擁護の説教を行う。その典型が1605年11月10日の火薬陰謀事件説教であった。その前日に James I 世が国会で行った火薬陰謀事件批判の演説直後の説教であるだけに Barlow の説教には James I 世の演説の影響が少なからず見られる。否、Barlow の説教は James I 世の国会演説がなければありえなかった説教であった。そして Barlow 以後の火薬陰謀事件説教はすべてが James I 世の国会演説と Barlow の説教に基づいているのである⁽³⁶⁾。説教で用いられる聖書の一節はもっぱら慈悲（および救出）、感謝および祝福に関係している。James I 世の救出、事件からの救出に対する神への感謝そして救出された James I 世祝福、これが以後の火薬陰謀事件説教の枠組みとなる。Barlow 以後の火薬陰謀事件説教はほとんどがこの流れに従っているのである。もちろんそれらの火薬陰謀事件説教はすべてが英国国教会説教家による説教である。体制派説教家であるがゆえに James I 世支持は当然のことであり、James I 世体制支持は説教家に課せられた義務である。火薬陰謀事件説教は以後毎年事件日の11月5日に様々な説教家によって行われることとなる。ここで一つの問題が起こってくる。それは火薬陰謀事件説教を行う説教家である。英国国教会説教家が火薬陰謀事件説教を行うのは当然のことであり、カトリック教会派の説教家が火薬陰謀事件説教を行わないのはこれもまた当然すぎることである。ところがもう一派の説教家がいる。それはピューリタン説教家である。彼らは革命が始まり、王党派との戦いが激しさを増すにつれてさかんに断食説教と称する説教を次々と行った。その断食説教のなかでピューリタン説教家が何度か火薬陰謀事件説教を行っている。英国国教会説教家の説教は Barlow の説教を見るまでもなくおおよそその内容は想像できる。ところがピューリタンは反体制派の集団である。もちろんピューリタンのなかにも様々な宗派があり、そのなかでも最大の宗派が独立派 (Independants) と長老派 (Presbyterians) である。後者は王政支持の立場に回る穏健派であり、Charles I 世処刑には反対していた。それゆえピューリタン説教家といってもその宗派が問題であることは確かである。それでもピューリタン説教家による火薬陰謀事件説教は興味深い。本論の後半ではピューリタン説教家による最初の火薬陰謀事件説教を取り上げ、アングリカン説教家の説教との類似点、相違点に着目し、論じていくことにする。

5 Newcomen の火薬陰謀事件説教

Newcomen (1610?–1669) は長老派に属するピューリタンである。兄の Thomas は王党派であったが、Newcomen は “The Agreement of the People” (1647) で極端な民主的な提案に反対している。本論で扱う説教の中で Newcomen はジェズイットの王殺し理論、実践を批判しているからも推測できるように、彼は王制寄りの長老派支持者であった。Newcomen は、内乱が本格化し始めた直後の1642年11月5日に火薬陰謀事件説教を行っている。そのタイトルは “*THE CRAFT AND CRVELTY OF THE CHURCHES ADVERSARIES*” (「教会の敵たちの狡猾と残虐」) で、下院議員を前にしたウエストミンスター¹の St. Margarets で行われた説教である。Newcomen 以前にもピューリタンの John Goodwin が1640年11月15日に火薬陰謀事件説教 “*THE SAINTS INTEREST IN GOD*” を行っているが、それはまだ内乱が勃発する以前の説教である。しかし Newcomen の説教は内乱が始まった直後の火薬陰謀事件説教であり、そこで彼はどのような説教を行っているかは興味深い。Newcomen の説教は単なる火薬陰謀事件に関わる説教であるのかそれとも内乱に直結する説教なのか。それとも他の目的があったのであろうか。彼の説教は英国国教会説教家の火薬陰謀事件説教と比較した場合、どのような説教となっているのか。Newcomen はピューリタンなので英国国教会派説教家と同じ内容の説教を行っているとは考えにくい。両者の間にはどのような相違があるのか、共通点はあるのかを最初に論じていきたい。

Barlow の説教で目立っていたのは James I 世の神格化である。説教に取り上げた「詩編」の作者と言われる David 再来としての James I 世が特に強調されている。ジェズイットの最大の攻撃対象が James I 世であり、その王朝打倒であったことを考えれば James I 世が説教で特に擁護され、神格化されることはなんら不思議ではない。英国国教会派説教家の目的が James I 世擁護を通して体制を維持することであったので、説教家にとって James I 世擁護は当然のことである。だから Barlow 以降の説教家も James I 世を聖書の人物 David にたとえ、王の神聖化、英雄化を図るのである。Newcomen の説教ではどうであろうか。

ピューリタン説教家は英国国教会派説教家と同様聖書の一節を説教の冒頭に挙げて説教を行う。Newcomen が取り上げた聖書の一節は以下の「ゼカリヤ書」4章11節である。

And our adversaries said, they shall not know nor see till wee come in the midst among them and slay them and cause the worke to cease.

この一節はバビロン捕囚からエルサレムに帰還し、妨害にあいながらも神殿再建を完成させたゼカリヤが神殿建設反対者は「工事」を止めさせようとしていると述べたものである。

Newcomen が説教に「ゼカリヤ書」を選んだ理由は彼の時代がゼカリヤの時代に類似しているからである⁽³⁷⁾。ゼカリヤの時代はどのような状況であったか。イスラエル人はバビロンでの捕囚人から解放されたが真理と平和の教会と国家における確立、神の神殿の再建、神の崇拜復活、エルサレムの城壁修理、主の安息日の神聖化が見られず、異なる宗教団がそれぞれの神を信仰していた時代であった。真の意味で国家が無秩序状態にあった

と Newcomen は言うのである。無法状態にあったイスラエルが秩序を取り戻すまでに長い時間を要した。イスラエル国家建設に最終的に奔走した人物はゼロバベル、エズラ、そしてゼカリヤであるが、ゼカリヤについて Newcomen は次のように言う。

The third was Nehemiah, the author of this Book, who according to the good hand of his god upon him, with invincible courage and indefatigable patience against the insolent scoffes, multiplied conspiracies and terrifying reports of his enemies, against the treacheries of some of his owne Brethren and Nobles, and against the murmurings of the people, with great expence of his estate and hazard of his life, carried on this great work, and gave it a full and blessed period, to the comfort of the Jewes and terror of their enemies⁽³⁸⁾.

ゼカリヤは身に降りかかる生命の危険をもいとわず「この偉大なる工事」を実行した。「工事」はエルサレムの城壁、城門の修復である。修復に際しゼカリヤはサマリア総督サンバラト、エドムの王ゲシム、領主トビヤによって反対されながらも修復を完成させる。ゼカリヤの時代に対して Newcomen の時代はどうか。Newcomen は、次のようにゼカリヤの時代が自らの時代といかに類似しているかを述べる。神の慈悲のお陰で英国国民はローマのバビロンの精神的捕囚から救出されたが、いまだに完全にローマの捕囚から脱していない。「ローマの捕囚」とは英国国教会がローマ・カトリック教会の影響下にあり、それが完全に払拭されていないことを意味している。Newcomen は以下のように英国がローマ・カトリック教会から完全に抜き切れていない現状について述べる。

...we see not that purity of Truth, that beauty of worship, that orderliness of administration, that strength of discipline, as wals and bulwarks about this our Jerusalem, which hath bin the desire, prayer, expectation of us & the ages that were before us⁽³⁹⁾.

ローマ・カトリック教会から完全に手を切っておれば「真理の純粹さ」「崇拜の美しさ」「運営の規律正しさ」「規律の強さ」は見られるのであるが、実際にはまだ見られない。ここで Newcomen は“this our Jerusalem”という表現を使用していることに注目したい。「この我々のエルサレム」はロンドンを意味することは言うまでもない。ロンドンとは旧約聖書のエルサレムなのである。エルサレムは神の国であり、ユダヤ人は神の選民である。同様に英国も神の国であり、神の選民である。選民意志の強かったユダヤ人と同じ神の選民としての英国人観である。ゼカリヤが国家統一のために宗教の統一を図り、不純な宗教を一掃したように英国も同様にゼカリヤと同じ道を歩むべきである。Newcomen の意図するところは英国をエルサレム再来としてとらえることによって、神の国＝英国を訴えたかったに他ならない。イスラエル人がバビロン捕囚の間聖都エルサレムは放置され、神を見失っていた。それと同じようにロンドンではローマ・カトリック教が徐々に英国国教会、Charles I 世王朝にも浸透し始め、真の宗教は見失われている。Newcomen は、バビロン捕囚時のエルサレムの現状はロンドンの現状に対応すると言う。Newcomen の時代に対

応する歴史が神の書の中にあるとすればそれはゼカリヤの歴史であると Newcomen は序文で書いているが、確かに Newcomen はゼカリヤの時代と Newcomen の時代を類似的に見ている。英国において真の宗教の確立にはゼカリヤ同様「悪意ある嘲笑」「残虐な陰謀」「様々な恐怖に満ちた報告」「同胞の脱会」「少なからずの人々不平」を英国国民は経験している。しかしゼカリヤ同様忍耐と固い決意により財産の出費も生命の危険もなく真の宗教確立という仕事にその成果はまだ見られないが専念している。まさしく英国国民はゼカリヤや彼の助手と同じ状態にある。Newcomen は英国をゼカリヤ時代のユダ王国と同一視し、ゼカリヤが幾多の反対・妨害にあいながらもエルサレムの城壁を修復したように英国も真の宗教確立を行うことができる。英国国民はまず真の宗教確立、教会改革、カトリック教根絶を実現するためには神に栄光を捧げることが急務となってくる。その先例がゼカリヤである。Newcomen は「ゼカリヤと英国国民への慈悲深い神の手を疑うな⁽⁴⁰⁾」と言うが、Newcomen はゼカリヤのように行動すれば英国にも必ずや神の報いがあることを信じて止まない。

Newcomen の下院議員を前にした序論から Newcomen の説教の内容がおおよそ予想できる。Newcomen の説教は火薬陰謀事件説教である。以下に見るように Newcomen は確かに火薬陰謀事件を説教で扱ってはいる。しかし Newcomen の説教における真の意図は火薬陰謀事件ではない。Newcomen の意図は「ゼカリヤ書」に書かれているゼカリヤの「工事」である。Newcomen は「工事」を主導したゼカリヤ個人を論ずることはしない。あくまでも Newcomen の関心はゼカリヤが行う「工事」である。それでは Newcomen の時代における「工事」とは何か。それは英国国教会の改革、広く言えば英国社会の改革である。それは Newcomen が幾度となく繰り返すように英国におけるローマ・カトリック教会の残存を徹底して根絶する「工事」である。その「工事」によって英国は真の宗教を確立できる。このように Newcomen は考えている。英国国教会派説教家 Barlow の火薬陰謀事件説教では事件の残虐性を強調し、事件を計画したジェズイットを徹底的に糾弾し、事件を未然に防いだ James I 世の英雄化、神聖化が論じられていた。Barlow の説教で James I 世は David 再来と激賞され、英国の救済者として賞賛される。しかし Newcomen ではどうであろうか。Barlow に見られたような James I 世個人崇拜はない。エルサレム復興に尽力したゼカリヤ個人が賞賛され、さらにはゼカリヤ = James I 世という図式が展開されることもない。あくまでも「工事」が説教の主題とされ、「工事」を妨害する敵の「狡猾」と「残虐」が説教で論じられることになる。英国国教会派説教家では個人崇拜、ピューリタン説教家では国家改革がそれぞれ説教で扱われることになる。これはそれぞれの説教の背景を考慮に入れれば容易に理解できる。一方は絶大なる絶対王制下での説教であり、その体制維持・強化のために体制の中心的人物、James I 世称賛は必須となる。James I 世なくして英国体制は維持できず、その存続はありえない。他方はその絶対王制が弱体化してきつつあった時代である。ピューリタンの台頭もある。しかし英国社会にはローマ・カトリック教の悪弊が蔓延している。その放置は英国社会が再度ローマの支配下になることを意味する。Charles I 世ですらローマ・カトリック教と結託し、しかもその妻はカトリック教徒である。そのような社会情勢下にある英国においてあからさまに James I 及び Charles I 世支持の姿勢を説教で表すことはできない。Barlow に見られた James I 世激賞を Newcomen が行わないのは当然のことである。諸悪の根源たる

Charles I 世及びローマ・カトリック教会影響を取り除く「工事」が急務となる。英国国教会派説教家の説教のテーマと Newcomen の説教のテーマの違いはおおよそ以上のような違いであるが、それでは Newcomen は火薬陰謀事件をどのように扱っているのだろうか。それを次に見てみたい。

7 Newcomen と火薬陰謀事件

英国国教会派説教家 Barlow の火薬陰謀事件説教の手順を概略しておこう。説教は、事件の残虐、事件を未然に防いだ James I 世賞賛、被害者を救出してくれた神の慈悲、神への感謝を扱う。火薬陰謀事件と類似した事件を聖書から選び、それを基にして事件を批判する。これが英国国教会派説教家の説教手順であった。とりわけ James I 世への神の慈悲を強調し、James I 世と神との密接な関係を指摘する。それでは火薬陰謀事件は Newcomen によってどのように捉えられているか。

Newcomen は最初にジェズイットによる反逆の計画の狡猾と残虐に言及する。彼らはなぜ狡猾か。「彼らの知らないうちに、また見ないうちに、彼らの中にはいりこんでいく」からである。ジェズイットの残虐は「彼らの中にはいりこんで彼らを殺し、その工事をやめさせる」からである⁽⁴¹⁾。狡猾な計画と陰謀の実行が誰も知ることがなかったのはジェズイットの誓いによる固い結束のためである。36樽もの火薬が国会近くの地下室に運ばれたが誰もそれを見ることはなく、反逆が少しも疑われることがないほど徹底して秘密裏に計画は準備された。神がジェズイットと共謀したと言われるほど完璧な準備であった。事件の残虐について Newcomen は次のように言う。

Never any Treason before this so destructive. Others were but petty Treasons compared with this. This was the master piece of all the policy of Rome and Hell. Unless it were the Treason of Satan against the state of Man in Paradise, to blow up all Man-kind in Adam, the representative of it at once, no Treason like to this⁽⁴²⁾.

国会爆破と共に James I 世を始め国家の要人殺害を狙う火薬陰謀事件の破壊性は前代未聞であり、これに比べると他の反逆は「取るに足らない反逆」である。火薬陰謀事件はローマ・カトリック教会と地獄の狡猾が生み出した傑作である。事件の残虐とサタンとの関連性はそれほど新しい見方ではない。英国国教会派説教家の事件観と相違はない。事件被害者「英国のジェントリーの鏡、英国すべての貴族、王の血統を引く王子たち、主が油を注がれた者、王の子孫⁽⁴³⁾」はすべて破壊の一撃の犠牲になる。事件の犠牲者についても英国国教会派説教家と同様な表現である。火薬を使った国会爆破による殺戮はこれまで聞かれたことはなかった英国史上で最初の爆破事件であった。

And that with such a slaughter, as was never heard before. Shew me in any History a president of the like slaughter as was intended here⁽⁴⁴⁾.

英国史上前例のない事件としての火薬陰謀事件観は英国国教会派説教家にも頻出する見方

である。聖書でも Abimelech, Saul, Athaliah による殺害から逃れた人もいたが、火薬陰謀事件では国会議事堂参列者すべてが殺害の対象となる。

But heere oh merciless cruelty, not one man that had escaped, neither King, nor Prince, nor Lord, nor any of that Honourable Assembly, though all of them, ... were men each one resembling the Sonne of a King, yet they had all perished together, in a moment, not one escaping⁽⁴⁵⁾.

一人残らずすべてが一瞬のうちに殺害されるという表現も英国国教会派説教家に頻出する表現である。ジェズイットに比べると悪魔でさえ慈悲深くなっていくほど事件は残虐に満ちている。爆破が成功していたら国はベスビオス山やエトナ山となり、アケルダマ、ゴルゴタになってしまう。事件の影響は大きく、教会と国家は無秩序状態化し、英国の法律、自由、宗教はすべて「火の深淵に飲み込まれ、灰の中に埋もれてしまう⁽⁴⁶⁾。火薬陰謀事件が国家に与える影響は計り知れないほど大きい。事件の社会への悪影響は英国国教会派説教家もしばしば言及しているので、Newcomen の見解には新しさはない。事件は幸いにも成功しなかったが、なぜ事件が失敗に終わったのか。これについて Newcomen は事件の失敗は単に国家の強い警戒心や用心深さのためではなく、「神の摂理」のお陰であるという。

And then it [the plot's failure] was not any State vigilancy or prudence, but merely divine providence that brought to light this worke of darknesse⁽⁴⁶⁾.

火薬陰謀事件を事前に明るみに出したのは神の摂理であるという考えは Newcomen 以前の英国国教会派説教家に共通した考えで、それはまた神の慈悲 (mercy) と密接に関連してくる。最終的に事件を未然に防いだ神に感謝を捧げることで説教が終わるのが英国国教会派説教の手順であった。Newcomen の神による事件からの救出は英国国教会派説教家となら変わるところはなく、両者に共通した考えである。Newcomen の説教の目的は事件発明の際の敵の巧妙さと残虐を明らかにし、併せて事件を未然に防いだ神の摂理を示すことにある。Barlow は事件発覚者 James I の背後にある神の慈悲を強調したが、Newcomen は個人ではなく「神の摂理」を全面に持ち出す。個人に関係なく神の摂理こそが歴史を動かすと Newcomen は考えている。これは神の選民としての英国人の見方につながるものである。Newcomen は、ジェズイットがいかに巧妙に事件を計画したか、いかに事件が残虐であるかを説教で説き、事件は神によって終結されたと見なすのである。あくまでも説教の攻撃対象は事件計画者のジェズイット及びその背後で暗躍するローマ・カトリック教会であるが、絶えず英国を見守っている神の存在をもまた Newcomen は強調する。Newcomen の説教は単に火薬陰謀事件について述べるだけではない。Newcomen の時代に英国国教会に取って代わろうとしていたローマ・カトリック教会が説教の攻撃の対象である。火薬陰謀事件も英国国教会を牛耳っている「敵」もいずれもローマ・カトリック教徒である。ローマ・カトリック教会の影響をすべて英国から取り除き、真の宗教の確立こそが Newcomen の説教がもっとも言わんとすることである。

火薬陰謀事件は神の摂理により未然に防がれたとする考えはすでに触れたように英国と神との密接な関係を示すものであり、それはまた神の民たるイスラエル再興としての英国国観に通ずる主張でもある。国会爆破事件からの救出は神がかり的な救出である。1588年のスペイン無敵艦隊への勝利も神がかり的な勝利であった。1603年のエリザベス女王の後継者も1605年の火薬陰謀事件からの救出も同じく神による救出であった。英国の背後には絶えず神がいるという考えは当時としては良く知られていたもので、それは英国人の選民意識をも高めてくれた。Newcomen は英国民のために神は多くの救出を行ってくれたと言う。旧約聖書に見られる救出は「多くのしつこい要求、止むことのない祈り⁽⁴⁷⁾」によって行われたが火薬陰謀事件の場合は神の自由な慈悲によって行われた。

But this Deliverance came not upon the wings of our prayers, but Gods free mercy, wee knew not our danger, and therefore could not make Deliverance the subject of our Prayers. Masses were said in Rome, for the good successe of the Catholicke designe, but no Prayers in England for our Deliverance from their Treason, and yet wee delivered, admirable Mercy! A people to be delivered by their God, before they seeke Deliverance⁽⁴⁸⁾.

普通救出を神にお願いする場合人々は神に祈るが火薬陰謀事件の場合は祈りを行う前に神が自由に慈悲をたれてくれ、英国を救出したというのである。神の自由な慈悲は神がいかなるときにも英国を見守っていることの証である。これは神と英国との密接な関係の表れである。事件からの神の救出は「燃える炉の中の三人の子供たち⁽⁴⁹⁾」の救出にも見られる。「燃える炉の子供たち」とは言うまでもなくネブカドネザルの命に反して炉に投げ込まれたが、炉の中を無傷のまま歩いた「ダニエル書」のシャドラク、メシャク、アベド・ネゴことに言及している。奇跡的な救出を強調する Newcomen にとって事件の解決は「神の行い⁽⁵⁰⁾」であった。神の慈悲によって事件は未然に終わったという考えは Barlow を初め、英国国教会派説教家にもよく見られた指摘であったが、Newcomen の神による救出観も彼らと同じものである。ただ違いは Barlow の場合神の慈悲と James I を結びつけていたのに反し、Newcomen の場合は王を慈悲と結びつけなかったということである。Newcomen は「エステル記」のハマンの王殺害計画を聞いたモルデカイがエステルに知らせ、その結果王は救出されたことを知った王はモルデカイに対しどのような名誉、威厳が与えられたかと問う王に触れているが、11月5日の火薬陰謀事件には「エステル記」以上の年代記に値する短い記録を見ていると言う。

You have seene how the God of Heaven prevented and disappointed a Treason as darke and cruell as Hell, intended against the whole State and Kingdome⁽⁵¹⁾.

「地獄と同じくらい暗く残虐な反逆」である火薬陰謀事件からの救出に対し、英国民は何をなすべきか。それはエステルが言ったように「事件救出に対しいかなる名誉、威厳が神になされたか」を問うことこそが英国民を代表する下院議員の義務となってくる。これは言うなれば救出のお礼としての神への感謝である。神への感謝はまた英国国教会派説教家が火薬陰謀事件説教で述べていることである。Newcomen は火薬陰謀事件から今日に

至るまで神の栄光の促進、福音の普及、カトリック教会抑圧のために何がなされてきたかと言う。ここで看過できないのは最後の「カトリック教会抑圧」である。これまで見てきたように Newcomen の説教は英国国教会派説教家の火薬陰謀事件観と類似点があったが、Newcomen が説教で最も強調したかったのは「カトリック教会抑圧」である。これが Newcomen の説教をピューリタンの説教とならしめ、英国国教会と著しく異なる点であると言える。「カトリック教会抑圧」は Newcomen の説教の重要なテーマの一つで、カトリック教の形骸化した教義の一掃によりより純粋な宗教を取り戻したいというのが Newcomen の、そしてピューリタンの願望なのである。形式化したローマ・カトリック教会との決別こそが英国における真の宗教再生となると Newcomen は考えている。しかし真の宗教復活には神への十分な感謝の念が必要である。ゼカリヤは主に対し称賛、称賛の聖歌を返したが、自らになされた恩恵に従って主のもとに戻ることはなかった。だからゼカリヤ、ユダ王国、エルサレムには主の怒りが下されたのである。英国についても同様なことが言われるのではないか。英国も英国になされた神の恩恵に従って神のもとに戻ることをしていない。「神のもとに戻る」とはローマ・カトリック教の偶像崇拝的な神ではなく、真の神に戻ることを意味する。何が英国をして「神のもとに戻る」ことを可能としていないのか。それはローマ・カトリック教会の英国国教会における不純な残存である。不純なローマ・カトリック教を英国から追放することによって英国は本来の宗教を取り戻すことができる。のろうべきローマ・カトリック教会の慣例が英国に見られるのに神は英国の追従的な称賛を望むであろうかとローマ・カトリック教会と完全に手を切っていない英国国教会の現状が批判される。

Care I, saith God, for the flattering praise of England, when I see the cursed practices of England⁽⁵²⁾!

更に火薬陰謀事件からの救出以来神の純粋な真理が汚され、ローマ・カトリック教会のはなはだしい誤りが受け入れられ、神の布告が汚され、ローマ・カトリック教会のひどい迷信が英国では実践されている。

Have not my purest Truths been adulterated in England, and Romes grossest errors entertained in England, and that even since this Deliverance⁽⁵³⁾?

腐敗した英国国教会の現状に怒りを発し、ローマ・カトリック教会を野放しにしている英国国教会の姿勢を激しく糾弾する。ローマ・カトリック教会の影響を脱し切れない英国はローマ・カトリック教司祭やジェズイット取り締まりの法律を施行することもない。ローマ・カトリック教会の迷信と偶像崇拝に自らを手渡すために神はローマの残虐行為から英国民を救出したのか。ローマ・カトリック教会に自らを手渡すことが主による恩恵に従って主のもとに帰ることなのか、と Newcomen は激しい口調で英国民のローマ・カトリック教への中途半端な生ぬるい姿勢を指摘する。

Did I deliver you this Day from Romish cruelties, that you should deliver up your selves

to Romish Superstitions and Idolatry? Is this to returne to the LORD, according to the benefits hee hath done⁽⁵⁴⁾?

Newcomen からすればローマ・カトリック教徒が計画した火薬陰謀事件から英国を救出し、事件関係者はすべて根絶されたのに英国国教会は依然としてローマ・カトリック教の影響の下にあるのは理解しがたいことである。火薬陰謀事件に関わったローマ・カトリック教徒を処罰し、英国に秩序を取り戻したように英国国教会もローマ・カトリック教から脱却する必要がある。ローマ・カトリック教からの離脱により英国国教会は真の姿を取り戻せる。Newcomen にとってローマ・カトリック教会は真の英国社会を築くに際し、耐え難い障害である。この障害を乗り越えることなしに英国社会は健全な社会にはなりえない。Newcomen の火薬陰謀事件説教は英国国教会派説教家の説教とは異なり、事件を引き起こしたジェズイット糾弾から始まり、最終的には Newcomen の時代のカトリック教の影響下にある英国国教会の現状を批判し、その影響から完全に抜け切ることを強く訴えるのである。英国国教会派説教家の火薬陰謀事件説教では説教はもっぱら事件だけを扱い、事件の凶悪性、残忍性を強調し、事件発覚者となった James I 世の神格化、事件救出者として神の慈悲称賛、神への感謝で終わっている。Newcomen の説教は事件についての記述では英国国教会派説教家との類似点が見られるが、James I 世の神格化を Newcomen は行っていない。Newcomen は James I 世については数回言及するが、ピューリタンであるためか王の英雄化、神格化は見られない。Newcomen が説教に取り上げた「ゼカリヤ書」4章11節に「敵はイスラエル人を殺し、工事を止めさせる」という表現があるが、Newcomen にとっては「工事」が説教での重要なテーマとなっている。英国国教会派説教家にとっては4章11節をいかに火薬陰謀事件に適応するかが説教の重要な点になる。英国国教会派説教家ならば火薬陰謀事件と類似した危機的状況にある人物が救出される一節を説教の冒頭に掲げ、その救出と火薬陰謀事件からの救出とを重ね合わせる。ところが Newcomen の聖書の一節には「救出」がない。「イスラエル人の知らないうちに、また見ないうちに、彼らのなかにはいり込んで彼らを殺し、工事をやめさせよう」の一節でイスラエル人が生命の危険にさらされることはなく、ただ彼らの「工事」の中断が問題視されている。英国国教会派説教家ならばこの一節よりもはるかに危機的状況にあるイスラエル人が取り上げられ、彼らが奇跡的に救出される場面が強調される。つまりピューリタンにとっては「個人」よりは「工事」が重要な役割を果たす。ピューリタンにとっての「工事」とは何か。それは繰り返して言うが英国国教会のカトリック教会影響からの脱却である。ピューリタンにとって火薬陰謀事件における James I 世の救出はそれほど重要ではない。だから Newcomen はほとんど James I 世を説教では取り上げないのである。むしろ個人崇拜よりも国自体がいかにしてカトリック教化から抜けきるか、それが急務なのである。「個人と神」の関係より「国家と神」の関係がより重要視される。英国国教会派説教家にとっては James I 世を称賛することにより James I 世王朝を維持することが国家体制維持へ至ることは自明であり、王なくしては国家は成り立たない。しかしピューリタンにとっては王制は必要ない。彼らの理想は共和制である。その共和制樹立の前提条件としてカトリック教徒の英国からの追放こそが必要で、国民の意思統一を図る。それがあって初めて「工事」は可能となる。

8 「ヒゼキア書」 4章11章と火薬陰謀事件

ピューリタンは最終的には王制打破により共和制樹立を試みるのであるが、元々長老派で王よりのピューリタンであった Newcomen が説教で James I 世や Charles I について詳細に論じることがないという事実は彼の反王制の一面を示しているのかもしれない。Newcomen は反王制と言うよりもローマ・カトリック教へ傾倒していった Charles I に反意を示しているのであり、実は英国国教会のカトリック教化が Newcomen の大きな関心事であった。1605年の火薬陰謀事件では James I 個人よりも事件を引き起こしたジェズイットの「狡猾」と「残虐」に Newcomen は注目した。そのジェズイットの「狡猾」と「残虐」が今なお英国において見られるのである。Newcomen の説教の特徴は英国からのカトリック教の完全なる追放である。なぜ Newcomen は火薬陰謀事件日に説教を行ったのか。それはローマ・カトリック教会が引き起こした事件であったからである。火薬陰謀事件も英国国教会のカトリック化ともローマ・カトリック教会が関わっていることである。ピューリタンにとって英国社会を震撼させた火薬陰謀事件の延長に英国国教会のカトリック化がある。それを阻止するには英国国民はより真の神への信仰を取り戻す以外に道はない。神への真摯な態度が英国国民には希薄である。神から恩恵を受けていながら神をないがしろにしている英国国民を Newcomen は叱咤する。下院議員にむかって事件日の11月5日に何かを行えと言う。神は、「この日」の自らの慈悲に従って神に戻る栄光を議員に取っておいてくれている。「神のもとに戻る」とはカトリック教からの離脱である。Newcomen は次のように言う。

You have begun to do more for the repressing of Popery, for the reforming of the Church in doctrine, worship, disciplines, then your forefathers have done ever since the first hand was put to the work of reformation⁽⁵⁵⁾.

下院議員はローマ・カトリック教会抑圧、教義、礼拝、規律において教会改革のためにより多くのことを行い始めた、と議員の脱カトリック教の尽力を認めてはいる。でもその脱カトリック教は完全とは言えない。これからはその脱カトリック教を徹底的に推し進めなければならない。

Go on to root out, not only Popery but all that is Popish. Let this day adde something towards the perfection of that work. ...Why to meet this day, if not to deliberate and advise something that might tend to the farther honour of the Authour of this days deliverance and the farther confusion of the Authour of this days treason, the Romish Religion⁽⁵⁶⁾?

Newcomen は、ローマ・カトリック教のみならずローマ・カトリック教的なものすべての根絶を下院議員に強く訴える。今国会を開催しているのは火薬陰謀事件救出者・神の名誉をさらに高め、反逆の張本人・ローマ・カトリック教会を混乱に陥らせることを考慮し、助言するために他ならない。救出に対しての神への感謝と敵であるローマ・カトリック教

会を混乱に陥れ、ローマ・カトリック教徒の英国からの追放こそが急務である。

I besech you make this the work of yours: and when you you returne to your Parliament House again let the first question put to vote this day be *Dauids Quid retribuam?* Psalm. 116. *What shall I render to the Lord for all his benefits towards me?* Let this be the question, and the God of wisdom and grace direct you in your Resolves⁽⁵⁷⁾.

“this” とは「神の名誉をさらに高め、反逆の張本人・ローマ・カトリック教会をさらに混乱に陥らせること」であるが、この二つが議員の「仕事」とならなければならない。この「仕事」はまた「ゼカリヤ書」4章11節の“the worke”に対応する。「詩編」116章12節は David が大病から回復したあとに歌われたと解する者もいるが、なにか個人的な危機状態からの救出に際して「わたしに賜ったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」の一節はそのまま今の英国民についても言えることである。神の栄光、教会の平和と善、王国の統一、カトリック教の一掃、これらが今英国民が行わねばならない「仕事」である。今英国が直面している最大の問題はカトリック教化している英国国教会を本来の姿に戻すことである。「カトリック教の一掃」こそが英国民にとっての最大の課題である。しかしそれはまだ完全には行われていない。なぜか。それは英国民の神への感謝の念が十分でないからである。

...due thankfulnesse for former deliverances is a happie meanes to procure new. God is never weary of delivering a people that studyes thankfulnesse⁽⁵⁸⁾.

以前の救出への十分な感謝があれば新たな救出を手に入れることが出来る。神は感謝を考慮する国民を救出することに飽きることはない。Newcomen は、英国民は火薬陰謀事件に対して神への感謝を忘れていることを指摘する。神への感謝の念の希薄化が今の英国におけるカトリック教一掃の遅々とした進捗をもたらしているのではないかと Newcomen は考えるのである。カトリック教徒の狡猾な残虐な気質は変わらないし、英国民壊滅陰謀は彼が自らの陰謀によって自らを破滅させるまでは止むことはない。カトリック教会を英国内にほっておけばやがて英国は完全にカトリック教化してしまう。その一例がアイルランド問題である。アイルランドのカトリック教徒は反乱を起こし、英国にとっては脅威の的となっている。彼らを現状のままに放置しておけば彼らはいずれ英国内のカトリック教徒と手を組み、英国をも完全にカトリック教国としてしまう。アイルランドの脅威について Newcomen は次のように言う。

Our adversaries in Ireland have bin plotting their present rebellion these seventeen years as some have deposed. These seventeen years they have bin making fireworks and laying traines for the kindling of that combustion which now devours that miserable Kingdome⁽⁵⁹⁾.

アイルランドのカトリック教徒は17年間も反乱を企て、「花火」を作り、それに点火する

ために導火線を敷いている。カトリック教徒は火薬陰謀事件を思い起こさせる爆破を計画しているというのである。アイルランドのカトリック教徒は火薬陰謀事件を引き起こしたカトリック教徒と同様、国家の破壊を目論んでいる危険な存在である。ここで Newcomen は国会の中断について考える。英国の国会がカロマ・トリック教会の荘厳な儀式のようになるのを恐れ始めた国会中断はどこから来ているのか。国会中断・解散は英国の敵の陰謀にその原因はある。英国の敵は英国の強さが国会にあることを知っているので、国会を断ち切ろうとしている。

So our adversaries knowing our strength to lye in our Parliaments have bin ever plotting to cut off them. One Parliament they attempted to blown up without powder that so our Parliaments being intermitted, interrupted they might at once lay bandes upon us, and put out our eyes that we should not see our owne bondage, slay us in our Lawes and liberties and we should neither know nor see⁽⁶⁰⁾.

カトリック教徒は国会の機能を停止させ、議員を拘束し、拘束を見ることができないように目をくり抜き、英国の法律と自由を行使し英国国民を殺すことである。カトリック教徒の行動を放置すればそれが何を英国にもたらすかは自明である。その前例はアイルランドである。カトリック教が勢力を保持しているアイルランドを見れば英国のカトリック教化がどのような結果を英国に生ずるかは自ずと明らかになる。だからなんとしても英国のカトリック教化を防がねばならない。英国国教会のカトリック教的な儀式の一掃、カトリック教徒の英国からの追放により、英国国教会の腐敗を取り除く必要がある。これを Newcomen は幾度となく繰り返す。英国はいまだ「救出」を必要としている。救出には神の助けが必要であり、そのためにカトリック教会とは手を切る必要がある。国会議員に向かって Newcomen は決然と敵と立ち向かえと檄を飛ばす。

God hath opened to you a great doore of opportunity for the promovng his Churches good but their [sic] are many adversaries. God hath called you together to a great work: but you must look our adversaries will do their utmost either by craft or cruelty to cause the work to cease⁽⁶¹⁾.

教会の善を推進するために神はチャンスの大きなドアを開けてくれた。これはカトリック教会を念頭においての言葉であり、「教会の善を推進する」とはカトリック教会にはできない宗教の改善を意味している。その宗教改善が「素晴らしい仕事」である。「素晴らしい仕事」に着手するかいなかは英国国民一人一人の意思にかかっている。門は開かれている。ただ必要なのは実行のみである。ただ敵は「狡猾」と「残虐」によってその仕事を止めさせることに全力を尽くす。しかし恐れる必要はない。なぜならば火薬陰謀事件という前例があり、神は英国国民を事件から救出してくれたからである。「過去の救出は未来の救出の証である。」これは過去に生じたことは未来にも生じるということを意味する。1588年のスペインの無敵艦隊により英国は敗北の危機にあったが神の慈悲によりその危機を脱した。1605年の火薬陰謀事件に際しても同様に神の奇跡的救出により惨事を未然に防ぐこと

ができた。英国が危機的状況に陥ると必ず神が救出してくれることは歴史が証明している。とすれば今の英国のカトリック教化の窮状からも必ずや神が救出してくれるはずだ。神の救出は一度で終わるものではない。神への真摯な信仰心を抱くことにより、神は困難に直面している人たちを助けてくれる。このように Newcomen は考える。形骸化したカトリック教では国民は救出されない。この考えにはピューリタンの「信仰のみ」の姿勢が強く反映されている。形式化した権威的になりすぎたカトリック教では個人の信仰心よりもなによりも教会への帰依が必須である。それに反しピューリタンは「聖書」のみの考えで、極端に言えば教会は無用である。いかに個人が神と向き合うことが教会を通して神と向き合うことよりもはるかに重要である。ピューリタン Newcomen のカトリック教会への批判は根強い。火薬陰謀事件を考えると、人々は事件の危機については皆無であった。それでも彼らは救出された。英国のカトリック教化という今の事件において人々はその危険を目の当たりにしており、「祈り」「涙」「断食」によって救出を求めて神のもとへ避難できる。祈りと涙の他に絶え間なく天国へ急行するキリストの諸聖人がいる。だから救出が達成できないことはないと言っている Newcomen は言うのである。英国人の「大義」の善と偉大さを忘れるなど Newcomen は議員に強く訴える。英国国教会の脱カトリック教会はピューリタンにとっては「大義」である。この大義があればこそピューリタンは迷うことなくカトリック教会と戦うことが出来る。大義なき戦いは無惨な敗北に終わる。ピューリタンは大義を共有することにより、カトリック教会追放の戦いに勝利を収めることが可能なのである。Newcomen はさらに聴衆を安心させるためにルターがドイツの宗教改革に際し友のメラントンに述べた言葉を引用する。宗教改革は人間が行うのではなく神が行うものであり、宗教改革という大義が聖なるものであり正当であれば、なぜ我々は神の約束を信用しないのかと Newcomen は問いかけるのである。神は我々との相談もなしにこの大義を決定し、守ってき、その大義を適切に終結させている。ルターの言葉特に最後の箇条は今の英国人に適応されえないのか。特に神はありのままの即座の摂理によって相談することもなく相談を受けることもなく人々の手中にある神の仕事を続けた。神は宗教改革の大義に望まれるものを与え、結果を祈った、だから人々はそれを確信できる、と Newcomen は言う。大義が正しければ神は自らその大義を実現させてくれる。Newcomen が直面している英国からのカトリック教追放はいうなれば宗教改革である。ルターの言葉が雄弁に物語るように宗教改革を推し進めてくれるのは神である。だから英国の宗教改革が失敗に終わることはないと Newcomen は聴衆に安心感を与える。英国におけるカトリック教は英国では無用である。それは人々の真の信仰心を無視するものである。だからカトリック教を英国から取り除く必要がある。これは英国にとっては大義としての宗教改革である。そしてその大義を実現してくれるのが神なのである。その宗教改革は現在のためのみならず未来のためでもある。

The things that you have now to do, are not only for the present but future ages. Your actions will live in the memory of men, as long as men shall live upon earth. Your work for eternity: Therefore be exact: work by rule, by line and plummet⁽⁶²⁾.

Newcomen は幾度も現在の宗教改革はただ現在のためだけでなく未来のためにあるのだ

と繰り返す。一時的な宗教改革ではなく未来永劫に続く宗教改革である。宗教改革が永遠に続くためには「厳密」でなければならず、「定規、線、測沿線」によらねばならない。感情の赴くままの宗教改革では長くは続かない。しっかりとした計画のもとでの宗教改革こそが真の宗教改革であると Newcomen は言いたいのである。宗教改革のためにはまず自らが「純粹」で「善良」でなければならず、ひたすら神の栄光に目を向ける必要がある。「何を行うにせよ神のために行え⁽⁶³⁾」これが真に宗教改革を行う人のモットーとなる。「我々の願望は流血なしで純粹と平和のなかで宗教の樹立を手に入れることであった⁽⁶⁴⁾」と Newcomen は言う。宗教改革はまさに神の意思でもある。ひるむことなく改革という神聖な仕事を続けなければならない。それもキリストが背後にいるので失敗の危険はない。

Goe you on undauntedly in that blessed work of reformation. Think you heare Christ speaking to you, ...Beare up courageously against the storm, ...Think you heare Christ so saying unto you⁽⁶⁵⁾.

キリストが絶えず助けてくれるから改革は必ずや成功すると Newcomen は聴衆に確約する。ただ我々が危惧しなければならないのは人々の“humiliation”である。

We observe it in particular persons that if they slide out of profane and sinfull ways, into ways of more retirednesse without any evidence of a sincere and proportional Humiliation: That reformation seldom proves lasting or saving⁽⁶⁶⁾.

俗的な罪深い生き方から誠実な謙虚さの形跡なしで世間と交渉を絶つ生き方に陥ることがあれば改革はめったに永続しない、と Newcomen は言う。ヨシアの輝かしい改革にもかかわらず主の怒りがエルサレムから取り除かれることはなかったのはなぜか、それはエルサレムに謙虚が見られなかったからである。

…the Land [Hierusalem] was never humbled for the Idolatries or Bloudsheds of Manasses, but looked upon the reformation as sufficient without humiliation which verily hath been Englands course to this day: we have blessed ourselves in a kinde of Reformation. But never took to heart the Idolatrous and bloody Laws enacted by our forefathers to bee humbled for them⁽⁶⁷⁾.

エルサレムは偶像崇拜やマナセの流血があつたにも関わらず謙虚な姿勢を示さなかった。マナセはゼカリヤの息子であるが異教崇拜を復活し、祭壇や偶像が神殿に置かれさえした。宗教改革は謙虚なしでも十分とみなしたが、それが神の怒りを買った。そのエルサレムの状況が今日まで英国の状況でもあつた。英国人は先人によって制定された偶像崇拜のための残虐な法律を心に留めることはしなかった。宗教改革の敵は内外にある。内なる敵は英国民の神への態度である。エルサレムの例で明らかのようにイスラエル人すべての神への謙虚な姿勢が失われたが故にイスラエル人は神の怒りを招いた。英国も同様であつた。外的な敵は宗教改革を阻止しようとする敵である。「ゼカリヤ書」4章11節ではユダびとが「荷

を負う者の力は衰え、そのうえ、灰土がおびただしいので、われわれは城壁を築くことはできない」と言ったが、英国の宗教改革では「荷を負う者の力が衰え」たが故に宗教改革を行うことは出来ないと、言うてはならない。英国を破壊することは神の目的・意図ではない。神の目的・意図はロンドンと英国を謙虚にさせ、弱体化させることであった。なぜなら英国は平和が長く続いたために経済的に裕福になり、神への信仰心が希薄化したために神は英国の富と自負心を除去すると言っているのである。だから進んで心地よく神の自由のままに身を任せば我々はそれによって我々の「生命、法、宗教」を得て、確保できる。しかし富に執着すれば富のみならずすべてを失うことになる。すべてを神にゆだねひたすら謙虚な姿勢を神に示さなければならない。物欲的な利己的な態度は神を喜ばすことはない。Newcomen によれば変化には完全な変化と腐敗的变化がある。宗教を腐敗させるために宗教を変えることはカトリック教の陰謀であり、仕事である。ローマ・カトリック教の変化を変え、彼らの革新を時代遅れなものとし、宗教を純粋な元の完全さへ変えることは英国議会の目的であり、仕事である⁽⁶⁸⁾。Newcomen にとってカトリック教会の変革は逆に宗教を破壊するものであり、ピューリタンの宗教改革こそが真の宗教改革である。英国の宗教改革を行うのは議会であり、英国国民が謙虚な態度で神に接すれば神は英国を去ることはない。

God hath not left, God will not leave his cause, his work, his people⁽⁶⁹⁾.

英国の歴史を見ても神は英国を去ってはいない。英国の存亡危機に際しても神は英国を助けてくれた。神はその大義、仕事、民衆を止めることはない。神と英国との密接な関係を述べる Newcomen は英国国内においていかに宗教改革が急務か、いかに必要不可欠であるかを強調して止まない。

むすび

Newcomen の火薬陰謀事件説教のタイトルは「教会の敵の狡猾と残虐」である。ローマ・カトリック教会がいかに狡猾に残虐に英国を苦しめてきたかを述べている。火薬陰謀事件説教なので Newcomen は火薬陰謀事件を最初に取り上げねばならない。しかし彼の火薬陰謀事件の取り上げ方は英国国教会派説教とは類似点もあるが相違点もあった。事件の残虐を指摘し、神の慈悲を訴える Newcomen は英国国教会派説教家と大して変わらない。ただ相違する点は英国国教会派説教家と異なり James I 世を称賛しないことである。英国国教会派説教家は露骨なまでに James I 世を激賞した。しかし、ピューリタン説教家の Newcomen にとって説教の中心は個人崇拜ではない。あくまでも彼らの関心はゼカリヤが主導したエルサレムの城壁再建という「工事」同様ピューリタンによる宗教改革という「工事」である。この「工事」こそがピューリタンに課せられた国家を左右する大事業であった。英国国教会派説教家とのもう一つの大きな相違点は聖書の火薬陰謀事件への「適応」である。英国国教会派説教ならば説教で取り上げる聖書の一節はある人物が生命の危機に陥れられる事件である。そしてその危機的状況からいかにして奇跡的に救出されるかが説教で述べられる。聖書での救出が火薬陰謀事件の救出と重ね合わされる。最後に奇跡的救

出を行ってくれた神へ感謝をする。これが英国国教会派説教家のお決まりの説教方法であった。ところが「ゼカリヤ書」ではゼカリヤの危機的状況は描かれない。エルサレムの城壁再建妨害がゼカリヤの危機的状況であると言えないこともないが、その工事は、敵がゼカリヤの生命を落とすような危機ではない。「ゼカリヤ書」の一節ではあくまでも「工事」妨害とそれを行う敵の狡猾さと残虐が重視される。Newcomenにとってゼカリヤ個人より「工事」が説教の主題となる。だから英国国教会派説教家と異なり、ゼカリヤ = James I世という図式をNewcomenは取らない。Barlowの説教に見られたDavid = James I世というお世辞めいた図式はNewcomenには見られない。確かに英国国教会派説教家とピューリタンの説教には相違はある。一方はJames I世体制の維持・強化を説教の目的とするが、ピューリタンは英国国教会の変革を説教の第一目的とする。両者にとってローマ・カトリック教は共通の敵であるが、特にピューリタンにとって眼下の敵ローマ・カトリック教会を英国より追放し、英国におけるローマ・カトリック教の残存を一掃することは社会変革の第一歩である。その意味でNewcomenの説教は火薬陰謀事件説教というよりは英国国教会をいかに変革するかが最大課題となっており、それはまたピューリタン社会樹立への大きな後押しとなっている。

Newcomenの説教は内乱が本格化した直後の説教であるが、彼は内乱にはほとんど言及していない。むしろNewcomenの説教の1年前の1641年10月のアルスターの反乱から始まったアイルランド・アルスターのカトリック教徒反乱がより切実な問題であった⁽⁷⁰⁾。ところがこの問題についてもNewcomenは本格的に論じようとはしない。同じカトリック教徒を英国内で放置しておけばそれがどのような結果を英国にもたらすかはアイルランドを見れば容易に理解できる。アイルランドのカトリック教徒問題はこの時代に大きな事件であり、ピューリタン説教家にもこの事件に言及する説教家がいる。ピューリタンの関心はむしろ国内のカトリック教徒であり、彼らの英国からの根絶こそが新しい社会の誕生をもたらす。Newcomenの説教における最大の関心事は英国国教会のカトリック教化であった。一言で言えばロード大主教による英国国教会のカトリック教化である。祭壇、東方礼拝、聖画、十字架、十字架像といったカトリック教の儀式が取り入れられ、カルヴィニズムよりアルミニズムが重視されるようになっていた。Charles I世側にはカトリック教徒が多く、王の妻はカトリック教徒であった。あるいは大反逆罪で訴えられたカトリック教司祭やジェズイットが釈放されたりした。カトリック教の悪弊が英国国教会を支配し、それはまた国王にも影響を及ぼしていた。英国内のカトリック教化は宗教のみならず社会全般にも及び、英国国教会の脱カトリック教はピューリタンにとっては極めて重要な問題であった。なんとかして英国国教会のカトリック教を一掃しなければ英国はカトリック教国になってしまう。このような強い危惧がNewcomenにはあった。火薬陰謀事件説教でありながら事件については詳細に論じることはなく、もっぱら英国国教会のカトリック教化を論じる理由は英国のローマ・カトリック教化への危惧があったからである。Newcomenの説教は単なる火薬陰謀事件説教ではない。それはカトリック教を英国国教会から追放することによって英国社会の変革を訴える説教である。この変革志向が「ゼカリヤ書」の「工事」であり、NewcomenはJames I世擁護による現状維持の姿勢は示さない。「信仰のみ」の精神から神への敬虔な謙虚な姿勢を人々に求めるNewcomenは社会変革の成功を信じて止まない。英国はイスラエル同様神の国である。Newcomenはロン

ドンを“this our Jerusalem”と呼び、英国国民はイスラエルと同じく神によって選ばれた国民であることを示唆している。「1640年以前の世紀には、多くの者がイングランドを、神が絶えず介入して保護する選ばれた国家と見ていた」と書いたのは Christopher Hill であるが⁽⁷¹⁾、その考えは1642年11月5日に火薬陰謀事件説教を行った Newcomen にも見られる。Cromwell が「キリストの革命」と呼んだ背景にも神が絶えず英国を見守っているという感覚があり、それゆえに神が長期議会を招集し、神がニュー・モデル軍を造ったと Cromwell は言うことができたのである⁽⁷²⁾。イスラエル人が幾多の困難にあいながらも最終的には神により救出されたように神の国、英国も多くの危機的状況に陥りながらも、必ずや神によって救出される宿命にある。神は英国を去りはしないのである⁽⁷³⁾。Newcomen は説教の下院議員に向けた序論で彼の時代をゼカリヤの時代とパラレルに見ている。イスラエルの人々はバビロン捕囚から救出されたが真理と平和の教会と国家における確立、神の神殿再建、神の崇拜復活等に長い時間を要した⁽⁷⁴⁾。この意味するところは英国人も火薬陰謀事件から救出されたが未だに真の意味で英国は再建されていないが、バビロン捕囚後にイスラエルが復興したように必ずや英国にも復興する時期がくるということである。イスラエル人を自らの生きる先例とした一ピューリタンの自信に満ちた説教は英国国教会派説教家が体制維持を訴えたのとは異なり、新しい社会の到来を信じて止まない説教である。その到来への確信はイスラエル人の歴史である。確かに今英国には「真理の純粋さ、崇拜の美しさ、教会管理の法令、規律の強固⁽⁷⁵⁾」はないが、これらはいずれ英国にも必ずや実現される。なぜかと言えば英国が歩む未来の姿はイスラエルにすでにその洗礼が見られるからである。イスラエルに起こったことは必ず英国にも起こる。これが Newcomen の説教の根底に流れるテーマであった。

体制の維持、新しい社会の誕生、これらを英国国教会派説教家とピューリタン説教家はそれぞれ執拗に追求した。英国国教会派説教家は火薬陰謀事件説教で事件を取り上げることによって国家の安泰を国民に訴えた。それに反し、ピューリタン説教家は火薬陰謀事件を取り上げながらも事件そのものよりは新しい社会建設によりエネルギーを注ぎ、国民の意思統一に奔走した。新しい社会建設には最初に英国国教会の脱カトリック教化を徹底しなければならない。英国がカトリック教の影響を一掃するとき初めて英国は生まれ変わった国家となる。時代の流れとしては王制は時代遅れの政治体制となりつつあった。中央集権的な国家体制よりも今度は国民個人が重視されてくる社会が誕生してくる。ピューリタン革命はまさしくその新しい社会建設を目指した革命であった。Newcomen は革命を本格的には論じていないが、ピューリタン説教家による火薬陰謀事件に言及はしながらも事件を起こしたカトリック教徒の「狡猾」と「残虐」に焦点を合わせ、その二つが今なお英国でその影響を深めつつあるカトリック教会の本質であることを訴えたいのである。英国国教会は Laud の主導によりますますそのカトリック教へと傾倒していった。Charles I 世の妻であるカトリック教徒 Henrietta Maria の陰謀、1641年のアイルランド反乱は英国内におけるカトリック教徒の脅威を示すものであった。Hill によればローマ・カトリック教会の恐怖は1640年代初期にピークに達したが⁽⁷⁶⁾、1642年11月5日の Newcomen の火薬陰謀事件説教はその Hill の言葉を裏付けている。Newcomen は、英国国教会のカトリック教化は火薬陰謀事件の延長であることを強調し、反カトリック教の姿勢を強く打ち出す。Newcomen の説教は、カトリック教の影響を英国国教会から排除す

ることによって新しい英国社会の建設を呼びかける愛国的な説教でもあった⁽⁷⁷⁾。

注

- (1) 以下の注14を参照。
- (2) Newcomen のテキストは Donald Wing STC907 を使用した。
- (3) Joel Hurstfield, “Gunpowder Plot and the Politics of Dissent” in Haward S. Reimuth ed. *Early Stuart Studies* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1970), p. 110.
- (4) Millar MacLure, *The Paul's Cross Sermons 1534-1642* (Toronto: University of Toronto Press, 1958), p. 20.
- (5) *Ibid.*, p. 97.
- (6) William Barlow, *The Sermons Preached at Paules Crosse, the tenth day of Nouember, being the next Sunday after the Discoverie of this late Horrible Treason* (London, 1606). Pollard and Redgrave STC Vol. I, 1445, B. なお旧約聖書の日本語訳については以下を使用した。『旧約聖書』(東京：日本聖書協会、1962年)。また、『聖書 新共同訳』(東京：日本聖書協会、1992年)をも参照した。その他『旧約聖書略解』(東京：日本基督教団出版局、1975)も参照した。
- (7) William Barlow, B.
- (8) *Ibid.*, C.
- (9) *Ibid.*, B2.
- (10) *Ibid.*, B3.
- (11) *Ibid.*, C.
- (12) *Ibid.*, B3.
- (13) *Ibid.*, D3.
- (14) McIlwain, p. 282.
- (15) Barlow, C3.
- (16) *Ibid.*, E2.
- (17) *Ibid.*, E-E2.
- (18) *Ibid.*, E2.
- (19) *Ibid.*, E3.
- (20) *Op. cit.*
- (21) Barlow, *An Answer to a Catholike English-Man* (London, 1609) 参照。
- (22) John Donne, *Pseudo-Martyr* (New York: Scholars' Facsmiles & Reprint, 1974) 参照。
- (23) MacLure, p. 89.
- (24) *Op. cit.*
- (25) Barlow, A3.
- (26) *Ibid.*, pp. 3-4 参照。
- (27) Barlow, C3.
- (28) *Ibid.*, D.
- (29) *Ibid.*, D2.

- (30) Ibid., D3.
- (31) Trevor-Roper, "King James and His Bishops" *History Today*, Sept., 1955, p. 581.
- (32) P. 5参照。
- (33) Barlow, E.
- (34) Op. cit.
- (35) Op. cit.
- (36) Mary Morrissey, *Politics and the Paul's Cross Sermons 1556-1642* (Oxford: Oxford University Press, 2011), p. 148.
- (37) Newcomen, A3.
- (38) Op. cit.
- (39) Op. cit.
- (40) Op. cit.
- (41) Ibid., p. 23.
- (42) Ibid., p. 24.
- (43) Ibid., p. 25.
- (44) Op. cit.
- (45) Op. cit.
- (46) Ibid., p. 28.
- (47) Ibid., p. 29.
- (48) Op., cit.
- (49) Op., cit.
- (50) Ibid., p. 30.
- (51) Ibid., p. 31.
- (52) Ibid., p. 32.
- (53) Op., cit.
- (54) Ibid., p. 32.
- (55) Ibid., p. 33.
- (56) Op. cit.
- (57) Op. cit.
- (58) Ibid., p. 34.
- (59) Ibid., p. 35.
- (60) Ibid., pp. 35-6.
- (61) Ibid., p. 56.
- (62) Ibid., p. 59.
- (63) Op. cit.
- (64) Ibid., p. 61.
- (65) Op. cit.
- (66) Ibid., p. 63.
- (67) Op. cit.
- (68) Ibid., p. 68.
- (69) Ibid., p. 70.
- (70) アイルランドの反乱については *THE IRISH REBELLION; OR, AN HISTORY OF THE*

- ...*GENERAL REBELLION...OCT., 1641* (South Carolina: Nabu Press, 2014) に詳細に記されている。また Samuel Rawson Gardiner, *History of England from the Accession of James I. to the Outbreak of the Civil War, 1603-1642*, Volume 10: 1641-1642 (Cambridge: Cambridge University Press, 2011), Chapter CI をも参照。
- (71) Christopher Hill, *Religion and Politics in 17th Century England* in *The Collected Essays of Christopher Hill* Vol. II (Brighton: Harvester Press, 1986), p. 323.
- (72) Christopher Hill, *A Nation of Change and Novelty: Radical Politics, Religion and Literature in Seventeenth-Century England* (London and New York: Routledge, 1990), p. 55.
- (73) Christopher Hill の *The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution* (London: Penguin Books Ltd., 1994), III の12に “God is Leaving England” があり、神が英国を去ろうとしていることへの人々の危惧が書かれている。
- (74) Newcomen, A3.
- (75) Op. cit.
- (76) Hill, *The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution*, p. 297.
- (77) Newcomen の説教のタイトルにある「狡猾」と「残虐」については本論では英国国教会へのローマ・カトリック教の影響と英国のその影響からの脱却について主として論じたので、取り上げることはしなかった。Newcomen は説教では Adam Contzen なるドイツ人ジェズイットを取り上げ、彼の「狡猾」と「残虐」を長々と論じている。説教の36頁以下を参照。

参考文献

- Martyn Bennett, *The Civil Wars in Britain & Ireland 1638-1651* (Oxford: Blackwell, 1997)
- Patrick Collinson, *Godly People* (London: The Hambledon Press, 1983)
- David Cressy, *Bonfires and Bells* (Gloucestershire: Sutton Publishing, 2004)
- David Cressy, *England on Edge* (Oxford: Oxford University Press, 2006)
- Anthony Fletcher, *The Outbreak of the English Civil War* (London: Edward Arnold, 1981)
- Richard Gust, *Charles I and the Aristocracy 1625-1642* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)
- Caroline M. Hibbard, *Charles I and the Romish Plot* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1983)
- Christopher Hill, *Puritanism and Revolution* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986)
- Anne Marie James, “Reading, Writing, Remebering: Gunpowder Plot Literature in Early Modern England, 1605-1688.” Ph.D. dissertation, Edmonton, Alberta, 2011
- William M. Lamont, *Godly Rule: Politics and Religion 1603-60* (London: Macmillan St Martin’s Press, 1969)
- J. Sears McGee, *The Godly Man in Stuart England* (New Haven and London: Yale University Press, 1976)
- Millar Maclure, *The Paul’s Cross Sermons 1534-1642* (Toronto: University of Toronto Press, 1958)
- William A. Shaw, *A History of the English Church During the Civil Wars and Under the Commonwealth* Vols. I and II (New York: Burt Franklin Reprints, 1974)

David L. Smith, *Constitutional Royalism and the Search for Settlement, c. 1640-1649* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994)

Hugh Trevor-Roper, *Archbishop Laud* (London: Macmillan & Co. Ltd., 1963)

Hugh Trevor-Roper, *The Crisis of the Seventeenth Century: Religion, the Reformation, and Social Change* (Indianapolis: Liberty Fund, 1967)

Hugh Trevor-Roper, *Catholics, Anglicans and Puritans* (London: Fontana Press, 1989)

Michael Walzer, *The Revolution of the Saints* (New York: Atheneum, 1976)

C. W. Wedgwood, *The King's War 1641-1647* (New York: Macmillan, 1959)

John F. Wilson, *Pulpit in Parliament* (Princeton: Princeton University Press, 1969)

上田惟一『ピューリタン革命史研究』(大阪：関西大学出版部、平成10年)

浜林正夫『増補版 イギリス市民革命史』(東京：未来社、1974)